【処刑執行】ヒロイン敗北

高杉晋太郎

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
【処刑執行】ヒロイン敗北

【Ｎコード】
Ｎ１６３０ＩＷ

【作者名】
高杉晋太郎

【あらすじ】
以前、御要望のありました「ブラックイット」シリーズのＲ１８版となります。本編のエピソードの一部を元に加筆修正して、大幅に内容が変わっていますのでご了承ください。Ｒ１８版ではヒロインが敗北してしまうバッドエンドとなります。
救いは一切ありません。ヒロインが拷問や惨殺されたりと酷い目にあいますので、苦手な方は御遠慮下さい。

【絶望】朱姫、永久拷問（前書き）

「ブラックイット」３話の朱姫と魍魎クロの対決シーンのＲ１８版です。戦闘シーンのみとなります。
途中から本編とは内容が異なっております。ご了承ください。

【絶望】朱姫、永久拷問

近付いてくる人影は、赤い襟に赤いスカーフで半袖の白い夏用セーラー服に、やはり赤い膝上３０センチはありそうな超ミニのプリーツスカートを穿き、そして太ももまである白いサイハイソックスに足元は赤いローファーを履いていた。見た目は女子高校生風な感じだったが……。

朱姫は、飛び掛かってきたクロの頭に、ハイキックを浴びせた。ミニスカートがヒラリと捲(まく)れ白い下着が丸見えになる。相手が普通の人間ならばこの頭部への鋭い一撃で勝負がついていただろうが、魍魎であるクロは何事もない様に前足の鋭い爪で、目の前に見える朱姫の股間を切り裂こうとした。

朱姫は飛び退いてクロの攻撃を避(よ)けると、今度はくるりと体を回転させ廻し蹴りを叩き込んだ。また、ミニスカートが翻(ひるが)り、白い下着が丸見えになる。

しかし、やはりクロにダメージはない。朱姫は白い下着を見せながらクルクルと後方転回を繰り返し、一旦クロとの距離をおいた。

・・・やはり、この猫魈(ねこしょう)は強い・・・

朱姫はスカートのポケットから呪符を取り出すと気を込め、クロに投げつけた。

「セーマンドーマン　」

朱姫に飛び掛ろうとしたクロの動きが封じられる。そして、印契(いんげい)を結び、魔を砕く真言(しんごん)を唱え始めた。

「ノウマクサンマンダ　」

しかし、クロは難なく呪符の結界を破り、朱姫が真言(しんごん)を唱え終わる前に襲い掛かる。朱姫はクロの攻撃を辛うじてかわすが、その攻撃の風圧だけで吹き飛ばされ、白い下着を見せながら激しく地面に叩き付けられた。

「ウグゥ！！」

朱姫は、地面に叩き付けられた衝撃で少し尿を漏らしてしまったが、そのまま芝生の上をゴロゴロと転がり、クロの追撃をかわすと素早く立ち上がり、再び真言(しんごん)を唱えようとするが、間髪入れずクロが襲い掛かる。朱姫とクロ、一進一退の攻防が続いた。

しばらく一進一退の攻防を続けていた朱姫とクロだったが徐々に均衡は崩れ始める。

クロが攻撃する時間が長くなってきていた。朱姫は致命傷を与えられるのを避けてはいたが、クロの猛攻にボロボロの状態になっていた。

ギリギリ攻撃を避けていた朱姫だったが、フェイントからのクロの突進を避けきれず顔面に受けてしまい鼻と口から血を流し、鋭い爪でセーラー服もスカートも所々切り裂かれ、その切れ目から覗く膨らんだ胸からも血が滲んでいる。

それでも朱姫は怯む事なく、涙が滲む目でクロを睨みつけていたが、足にもダメージを負ったのかスカートから覗く右足に血が流れブルブルと細かく震えていた。

朱姫のダメージを察したクロは、耳まで避けた巨大な口を開け跳躍する姿勢をとる。

どうやら、朱姫を頭から一呑みにして食い千切り、ここで始末してしまうつもりのようだ。唸り声を上げ飛び掛かるタイミングを計っているようにみえる。

足を負傷した朱姫は動けずにいたが、その場で素早く印契を結び守護の真言を唱える

「オン・サンマヤ・サトバン」

今度は朱姫の方が一手早かった。飛び掛かってきたクロの前に普賢菩薩が現れ、クロの攻撃を跳ね返す。

攻撃をかわされたクロはくるりと体を回転させ着地したが、そこへ朱姫が痛む足にかまわず一気に間合いを詰め右足を高く上げる。ミニスカートが捲れ、漏らしてしまい染みのできた純白の下着の股間がクロの目にアップで映った次の瞬間、クロの頭に光速で踵(かかと)が落ちてくる。朱姫の足から腱が切れ骨が砕ける様な嫌な音が響く。しかし、クロの頭が地面にめり込む程の凄まじい威力だった。これで決着がついたかと思われたが、クロは頭を振りながら朱姫の足から逃れ、距離をとると威嚇するように大きく咆哮する。

この一撃で決めるつもりで足を犠牲にした朱姫は愕然としながらも再び印契を結んだ。

クロは朱姫が真言を唱える前に攻撃を仕掛け妨害する。しかし、その動きには先刻までの余裕が感じられ無かった。クロも朱姫の決死の攻撃でかなりのダメージを受けたようだった。それでも、互いにダメージを抱えながら決して退かずに両雄は攻撃を続けていたが、やはり朱姫のダメージが大きかったようで動きが目に見えて鈍くなってきていた。

クロの攻撃を間一髪避けている朱姫だったが、着ている服がどんどんと切り裂かれていき、ついにセーラー服の上着が剥ぎ取られて

しまった。

「くっ……」

朱姫は怯まず蹴りを入れるが、クロは攻撃をかわし鋭い爪で反撃する。今度はスカートが切り裂かれ剥ぎ取られる。朱姫は地面に転がり距離を取ろうとするが、クロの追撃が朱姫を襲い、とうとう朱姫の胸を隠す白いブラと、股間を隠している白い下着も切り裂かれ剥ぎ取られてしまった。

朱姫はクロの追撃を逃れ、なんとか立ち上がったが、太ももに食込むサイハイソックス以外全裸にされ、胸の膨らみや股間にも傷を負い血が流れていた。

・・・負けるわけには　・・・

朱姫はほぼ全裸で全身傷だらけになりながらもクロに攻撃を仕掛けていたが、クロの攻撃を避けようとした際に、踵落(かかとお)としで痛めてしまった足の為バランスを崩し仰向けに倒れてしまう。そこへ、クロがすかさず飛び掛かり朱姫の身体を押さえ付けた。前足で朱姫の両腕を押さえ込んだクロは口を大きく開きトドメを刺そうとする。朱姫は逃れようともがくが、クロは更に強く朱姫の両腕を押さえ付け、朱姫の腕から嫌な音がし、骨が粉々に砕けていった。

「う、うぎゃぁーー！！」

たまらず朱姫は悲鳴を上げる。そして、朱姫の股間から透明な液体が湯気をたてて溢れ出した。あまりの激痛に朱姫は激しく失禁してしまっていた。朱姫の尿道から止まることなくシャーッと尿が溢れ水溜まりを作っていく。それでも朱姫は涙と尿を漏らしながら痛みに耐え逃れようともがいていた。その朱姫の心を折る為、クロが

朱姫の体をさらに痛ぶっていく。尿を漏らす朱姫の股間に目を付けたクロは、朱姫を前足で押さえ付けたまま後ろ足からも鋭い爪を伸ばす。そして、朱姫の股間・性器にその鋭い爪で突き刺した。

ドスゥ！！！

「あっ、びゃゃゃーーーー！！！」

朱姫の絶叫が響き渡る。朱姫の性器に突き刺したクロの爪は、朱姫の下腹部を突き破り、その先端を覗かせている。クロはさらに朱姫の性器に突き刺した爪で、そのまま朱姫の性器と肛門を切り裂いた。

ズバァァ！！！

「あばあぁぁぁぁーーーー！！！」

絶叫する朱姫の股間から血が噴き出し肛門の辺りで悪臭が漂う。朱姫は性器と肛門を切り裂かれ、ぶりぶりと大便も漏れ出してしまっていた。

「ひぎぃぃぃーーー！！！！」

性器を破壊され動くことも出来ず涙を流して絶叫する朱姫は、体をビクンビクンと大きく痙攣させていたが、クロは更に致命の一撃を朱姫の体に加える。朱姫の恥丘を思い切り踏みつけたのだ。

バギィィィ！！！

凄まじい音と共に朱姫の恥骨が粉々に砕け、性器の中身、膣も子宮も、そして、膀胱も形も残らない程潰されてしまっていた。クロは

さらに朱姫の下腹部をグリグリと踏み潰す。朱姫は白目を剥き口から泡を噴いて無様に失神し体をビクンビクンと大きく痙攣させていた。クロは朱姫のその姿を見て勝利を確信したようで、倒れているタダユキの元に行くと彼を背中に乗せ暗闇の中に消えていった。

しばらく静寂が続いていたが、暗闇が一部急に濃くなると、その中心から手が伸びてきた。そして、性器を破壊され失神している朱姫を掴みズルズルと引き摺っていく。朱姫の体は闇の中に消えていった。

ハッと朱姫が気が付くと何処かの部屋の中に居るようだった。破壊されたと思っていた性器も元に戻っている。腕も治っているようだか、後ろ手に拘束されているようで動かす事は出来なかった。それに、切り裂かれてしまった衣服は元に戻っておらず、サイハイソックスだけの姿は変わらなかった。

「お目覚めのようですね　わたくしは“玉藻の前“と申します　あなたの体は治療しておきました　」

着物姿の女性がニコリと微笑む。

「助けて頂いてありがとうございます　それで申し訳ないですが、この拘束も解いてもらってよろしいですか　あの、私、怪しい者ではありませんので　」

“玉藻の前“は静かに、だが残酷に口を開く。そして、先程まで朱姫が戦っていた魍魎クロよりも更に強い闇の波動を周囲に発散する。

「残念ながら拘束を解くつもりはございません　あなたはわたくし

の食料なのです　時間をかけて、あなたを食していきます」

その圧倒的な威圧感に朱姫は今度こそ自分の最後だと実感して震えが止まらず、またチョロチョロと漏らしてしまっていた。

「あ、あ、あ、あ、お願い、許して　助けて」

朱姫の股間から湯気をたてて溢れ出る尿を見つめ“玉藻の前“は笑い出した。

「わたくしの好物は人間の恐怖と苦痛なのです　良いですね、もっと恐怖しなさい」

“玉藻の前“は朱姫の体を逆さに吊るすと足も大きく広げて固定した。朱姫の性器が丸見えになる。朱姫は腕を背中で縛られ大きく開脚されたまま逆さに吊るされ尿を漏らしながら泣き出していた。それは恐怖に震える普通の少女の姿だった。

「とはいえ、わたくしの居室を汚した罰は与えないといけません」

“玉藻の前“の指先に青い炎が燃え上がる。

「これは異界の炎です　これで漏らすようなだらしないあなたの性器を焼いてあげましょう」

“玉藻の前“は朱姫の性器に炎をのせる。炎は朱姫のクリトリスや小陰唇等の外性器を焼き尽くしていく。

「あびゃゃゃーーー！！」

朱姫は絶叫して肛門から大便も漏らし始めた。“玉藻の前“は朱姫の肛門にも炎をのせてしまう。

「締まりのないこの穴も焼いた方がいいですね」

朱姫は股間を二つの炎で焼かれ絶叫するが“玉藻の前“は、さらに朱姫の恐怖と絶望を絞り出す工夫を考える。

「せっかく穴が空いているのですから、その中も焼いてあげましょう」

“玉藻の前“は朱姫の尿道と肛門の中にも炎を入れる。膀胱と直腸も焼かれ始める。そして、膣の中にも当然炎を入れるが、さらに細い子宮口も抉じ開け子宮の中にも炎を入れた。朱姫の膣も子宮も容赦なく焼かれ始めた。

「あっ、びゃぁぁぁーーーー」

体の中からも焼かれ絶叫する朱姫にさらに追い討ちをかける為、“玉藻の前“は恐怖と苦痛でツンと固く上を向く朱姫の二つの乳首にも炎を着けてしまう。二つの形の良い膨らみの先端でゆらゆらと炎が揺れる。

「あびゃびゃびゃびゃ、じぬうぅぅーーー」

泣き叫ぶ朱姫の口に粘着テープを貼り“玉藻の前“は朱姫の口も塞いでしまった。

「うるさいですね　死ぬ程の苦痛でしょうが、殺しませんよ　この異界の炎は焼き尽くすと同時に、焼いたものを再生するのです　で

すから、焼かれたものは瞬時に再生し、また焼かれるという事を永遠に繰り返すのです　あなたは寿命が尽きるまでこの苦痛を味わい続けるのですよ」

朱姫は絶望で気が狂いそうだった。一秒でも耐えられない性器と肛門と乳首を焼かれる激痛に、何十年も耐えられるわけがない。朱姫はポロポロと涙を溢す目で、もう早く殺してと訴えるが“玉藻の前”はその朱姫の目にも粘着テープを貼り視覚も封じてしまった。朱姫は、目も見えず口もきけず腕も縛られ開脚逆さ吊りでクリトリスや小陰唇、それに膣、子宮、尿道、膀胱も、さらに肛門、乳首も永遠に焼かれていく。まともな精神で耐えられる筈がなかった。その救われない絶望で朱姫の精神は粉々に砕け、静かに発狂していった。

・・・あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ……　・・・

朱姫はもう何も考えられなかった。人に耐えられる苦痛を遥かに超える性器を子宮を焼かれる激しい地獄の拷問を、誰も知らない場所で、たった一人で朱姫は永久に味わっていく。発狂してしまった事は幸せだったといえた。

【絶望】朱姫、永久拷問（後書き）

終盤から結末は本編オリジナルとまるで異なる内容になっております。ご了承下さい。

「ブラックイット４」で登場する“玉藻の前“が最後に出てくるのはご愛敬です。

こんなバッドな結末もあったかもしれないですね。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　前編（前書き）

「ブラックイット４」５話のＲ１８バージョンです。青姫と玉藻の前の対決シーンから始まります。導入部分と全体の流れ以外、オリジナルとは内容が異なります。青姫・神宮寺卯月が思い切り酷い目にあいます。青姫が辱しめられ性器を破壊され惨殺される内容になりますので気を付けて下さい。また、スカトロやグロ要素も多いと思うので苦手な方は御遠慮下さい。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　前編

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　前編

「いいですか　私がどんな目に合おうと気にしては駄目ですよ」

青姫はそう言い残すと、再び玉藻の前と対峙する。タダユキは、それは無理だよ姫、と心の中で呟いた。

青姫は体術で玉藻の前の動きを崩し真言を唱える時間を稼ぐ考えで、蹴りや拳を繰り出し玉藻の前に攻撃を与え続ける。その動きはまるで〝流水〟。流れる水の如く淀みなく、しかも岩や石をも砕く強さも持つ。綺麗だ……。タダユキは青姫のその動きの美しさには勿論だが、青いプリーツのミニスカートから時々見える青姫の白い下着の眩しさにも目を奪われた。回し蹴りやハイキックをする度、青姫の股間で白い下着が性器に食い込んでいる様子までハッキリ見えた。

・・・駄目ですよ、姫　・・・

タダユキは、こんな緊迫した状況でありながら固くなってしまっている自分のモノを両手で押さえた。青姫の攻撃は無駄も隙もなく完璧なものに思われたが、タダユキの心の中で不安が大きくなっていく。

・・・何だろう、この嫌な感じは……　・・・

青姫は変わらず流れるような華麗な動きで玉藻の前を攻撃し続けている。だが、さすがにその速度が落ちて来たようにタダユキが感じたその時、青姫の放った回し蹴りをそれまで受けていた玉藻の前が、ガシッと足首を掴む。青姫は、残る軸足でさらに蹴りを叩き込むが、それも玉藻の前に掴まれた。そして、そのまま青姫の両足首を掴み逆さに吊るした玉藻の前は、スカートを押さえ青ざめている青姫を見てニヤリと笑うとそのままグルグルと青姫を振り回す。そして、青姫の頭を周囲に生えている大木の幹に叩き付けた。

「姫っ！！　」

タダユキが叫ぶ。青姫はスカートから手を放し両腕で頭をガードし無事のようだったが、安堵する間もなく続けて玉藻の前は青姫を振り回し再び木の幹に青姫の頭を叩きつけた。

「ぐうっ　」

なんとか腕でガードした青姫だったが、玉藻の前は自分の攻撃をガードした青姫が気に入らず、青姫の体を逆さのまま空中に固定する。

「この腕が邪魔ですね　」

玉藻の前は再びスカートを押さえている青姫の両腕を乱暴に掴むと無理矢理背中にまわし二度と動かせぬよう高手後手にきつく縛りあげた。両腕を縛られた青姫のスカートが捲れ白い下着が露わになる。

そんな無様な姿を晒されながら青姫の口が動いた。そして、何か呟いたかと思うとタダユキとクロの周りにドーム状の結界が張られ、

青姫の口がニコリと微笑む。その中にいれば大丈夫、君はそこから動かないで下さい。青姫の目がそう訴えていた。

「結界など無駄な事を……　なるほど、この口も邪魔ですか　」

玉藻の前はまた青姫の体を固定すると、その口にテープを何重にも貼り青姫の口も塞ぐ。

「うっ、うっ、うっ、うっ……　」

腕を縛られ口も塞がれた青姫は、もはや印契を結ぶ事も真言を唱える事も出来なくなった。反撃する事も抵抗する事も出来なくなった青姫は、これから自分がどれだけ残酷な目にあい殺されていくのか想像し、我慢しようとしても出来ずに涙が溢れ出した。そして、一旦涙が溢れてしまうと、もう止めることが出来ずに青姫は体を震わせ泣き出していた。腕を縛られ口も塞がれ白い下着も丸見えにされ体を震わせ泣いている青姫の哀れな姿を見て玉藻の前は残酷に笑うと、また青姫の体を振り回し始めた。腕を縛られている青姫は、もう顔面をガードすることが出来ない。今度は確実に顔面が樹木に叩き付けられる事になる。

・・・嫌ぁっ怖いぃっ、許して下さいぃっ・・・

振り回されている青姫から水滴が辺りに飛び散っていた。それはこれから自分の身に行われる行為への恐怖で、すでに泣き出している青姫の涙以外にも、青姫の股間からもチョロチョロと漏れている液体が混じっていた。青姫は恐怖のあまり不様に号泣し、失禁してしまっていた。玉藻の前はそんな青姫に恐怖を存分に味わわせる為、わざと顔面をぶつけず、樹木ギリギリを通す。

「うぅぅーーっ　」

青姫はグルグルと振り回されながら目を見開き、迫る木々を涙を流しながら見つめていた。何時くるか分からない自分の顔面を襲う想像もつかない激痛に少しでも備える為、怖くて目を瞑っていられなかったのだ。そして、何回か振り回された後に、それはきた。目の前にぐんぐんと迫る大木が明らかに自分の顔の正面にある。青姫の恐怖は最高潮に達した。いやぁ怖いぃもう許してくださいぃ、青姫は塞がれた口で許しを乞うが無駄な事だった。

「うぅぅーーーーっ！！　」

青姫は泣きながら歯を食いしばり自分の顔面を襲う衝撃に耐えようとした、その直後……。グシャ……。青姫の顔面が容赦なく木の幹に叩きつけられ、青姫の体は一瞬棒のように硬直する。叩きつけられた顔面からは血が滴り、股間からもポタポタと尿が漏れていた。そして、そればかりか青姫はなんとショックで大便まで漏らしてしまっていた。下着の尻の部分がこんもりと盛り上がり悪臭を放っている。青姫が受けた恐怖と苦痛がどれ程凄まじいものだったのか、青姫のその無惨な状態を見れば一目瞭然だった。しかし、玉藻の前はそんな事にはお構い無く青姫をまた振り回す。

・・・もう嫌ぁこれ以上は許して下さいぃぃっ……　・・・

玉藻の前は腕を縛られ泣きながら大小便を漏らす青姫の顔面をまた容赦なく思い切り木の幹に叩き付けた。青姫の顔面から血が飛び散り、さらに股間からも小便がピュッピュッと飛び散り、大便がぶりぶりと排泄されていた。

「あっ、あっ、あっ、あっ……　」

口を塞がれ呻き声を上げる青姫を玉藻の前は高く掲げ、顔面が壊され泣きながら漏らしてしまっている青姫の無惨な姿をタダユキに見せつける。そして、再び振り回し青姫の顔面を木の幹にまた叩き付けた。また青姫の顔面から血が飛び散り、股間からもぴゅっと小便が飛び、大便がぶりっと噴き出した。青姫の白い下着の汚れが惨めに拡がっていく。玉藻の前は楽しむように両手を縛られ無防備な青姫の顔面を何度も何度も執拗に木の幹に叩きつける。その度に青姫の顔面から血が飛び散り、股間からは小便がぴゅっと漏れ、大便の汚れが拡がっていった。青姫の顔面は、鼻の骨や歯は折れ、額や唇は裂け目の周りも腫れ上がり塞がっている。そして、涙と鼻水が血と混じり、凛々しく可愛かった青姫の顔が、人の顔とは思えない状態になっていた。

「やめて下さい……　姫が死んでしまう……　」

タダユキは震えながら玉藻の前に懇願するが、玉藻の前は声高に笑うのみだった。

「ふはははは、良いですね　もっと、絶望するのです　そして、わたくしを憎むのです　」

青姫の顔面はグシャグシャになり振り回される度に血と大小便が飛び散る。青姫はすでに意識がなくなり声も上げなくなっていた。それでも顔面を木の幹に叩きつけられる度に、血と大小便が飛び散る。まるで地獄絵図のような凄惨な光景が繰り広げられていた。しかし、声を出さなくなった青姫が気に入らないのか、玉藻の前は一旦青姫の顔面を叩きつけるのを止め、逆さに吊るした青姫を再びタダユキに晒すとニヤリと笑い、青姫のグシャグシャになった顔面に手を当て何か呟く。すると、うっと青姫が意識を取り戻し、自身を

襲う激痛にうめき声をあげ涙を流す。

「人間は排泄の管理も出来ないようですね　汚らわしい」

玉藻の前は鋭い爪で青姫のミニスカートを切り裂き剥ぎ取る。そして、大小便で汚れてしまっている青姫の白い下着をタダユキの前に晒した。更に青姫の足を開こうとする玉藻の前に青姫は涙を流し必死に足を閉じようと抵抗した。

・・・いやぁ、許して下さい　・・・

しかし、青姫の必死の抵抗も空しく玉藻の前は青姫の足を大きく開くと、その汚れた股間をハッキリとタダユキに見せつける。青姫の白かった下着が、漏らした大小便で激しく汚れていた。

・・・いやぁっ、もう早く殺して下さい　・・・

顔面を破壊され、大小便を漏らしてしまった激しく汚れた下着を晒され青姫はもう死んでしまいたかった。しかし、青姫に対する虐待と辱しめは、まだまだ続いていく。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　前編（後書き）

顔面を破壊され、汚してしまった股間を晒される青姫。
だが、青姫が受ける屈辱と苦痛はそんなものでは終わらなかった。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　中編（前書き）

スカトロ要素多めなので、その方面が苦手な方は気を付けて下さい。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　中編

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　中編

「まったく汚らしい　こんな姿を晒してはこの娘、生きていたくないでしょうね　」

玉藻の前は笑いながら、青姫の汚れた下着を脱がしていく。そして、脱がした下着を汚い物を放り投げるようにタダユキの前に投げ捨てた。

「さあ、その糞尿まみれの下着を持ちなさい　そして、股間部分の匂いを鼻に付けて嗅ぐのです　」

玉藻の前はタダユキに命令する。青姫は、涙の溜まる瞳で絶対に止めて下さいというように嫌々と首を横に振る。玉藻の前はタダユキの動きを確認するように鋭い眼で見ていた。ここで逆らってしまえば、青姫は殺されるだろう。タダユキは汚れた下着を手に取る。青姫の下着は小便でぐっしょりと濡れ、大便がべったりと付着していた。もう、それは汚物といって間違いなかった。

「さあ、早くしないと今度はこの娘の性器を破壊しますよ　」

タダユキは青姫の見ている前で、青姫の汚れた下着の匂いを嗅ぐ。ツンとした青姫の小便の臭いと、モヤッとした大便の悪臭が鼻をつく。

「ふはははっ、良いですね　次はその下着を頭に被って自慰するのです　股間の汚れた部分が鼻と口に当たるようにするのですよ」

青姫はほとんど塞がった目で、お願いします、そんな事は止めて下さいと訴えるが、タダユキは意を決した顔で青姫の汚れた下着を被り、ズボンを下ろすと自分の性器をしごき出した。

「いいですか　放出する時は、この娘のグチャグチャの顔にかけて、忘れずに口の中にも入れてあげるのですよ」

玉藻の前は青姫の口を塞いでいたテープをバリバリと剥がす。タダユキは青姫の汚れた下着を被り大小便の臭いに包まれ、その姿を青姫に見られながら自慰する行為で精神がおかしくなりそうだったが、自分の性器をしごき続ける。そして、放出しそうになり慌てて青姫の前に行った。逆さにされている青姫の顔面は丁度タダユキの性器の位置で、タダユキの顔の前には青姫の割れ目があった。青姫のまさに眼前で、自分の性器をシゴイている様子を見られていると思うと、うっとタダユキは堪らす放出していた。青姫の顔面に精液がかかり白く汚れていく。慌ててタダユキは玉藻の前に言われた通り、青姫の口に自分の陰茎を突き刺し、青姫の口の中にも精液を放出した。

「今度はこの娘の喉を犯してあげなさい　こんな顔ではもう誰も相手をしてくれないでしょうからね」

玉藻の前は楽しそうに笑いながらタダユキに命令すると、なんと青姫もタダユキに、遠慮なく私の喉を犯して下さいと小さな声で告げた。逆らわずにいれば、自分は殺されても彼の力を欲しがっている玉藻の前は殺す事はしない筈、そうすれば彼は助かる、そう青姫

は考えていた。

「君、かまいませんから私の喉を犯して下さい　」

躊躇しているタダユキに、また青姫が小さな声で促す。タダユキは青姫の頭を両手で押さえると、青姫の口に自分の陰茎を再び突き刺した。

「おごおぉぉーーっ　」

喉奥まで貫かれ青姫が苦しげな声を上げる。玉藻の前は、その様子を観察していた。

「もっと、奥　きちんと食道まで突き入れて下さいね　ほら、その娘の頭を押さえて奥まで入れるのですよ　そして、激しく犯すのです　」

玉藻の前はタダユキが手心を加えているのを見抜き残酷に命令する。タダユキは両手に力を入れ青姫の頭をがっしり押さえると、自分の陰茎を根本まで突き入れ、激しく腰を振りだした。

「おぼっ、おぼっ、おぼっ、おぼっ、おぼっ　」

苦し気に涙を流している青姫の喉で、タダユキの陰茎が動いている様子が外から見てもはっきりと確認できた。

「良いですね　そのまま、その娘の中に放出するのですよ　」

タダユキの腰の動きがさらに激しくなっていく。

ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ

青姫の唾液が口から溢れ出て、タダユキの陰茎が激しく青姫の口腔に抜き差しされている。それが淫靡な音となり辺りに響いていた。青姫はタダユキの陰茎で喉を塞がれ呼吸が出来なくなり、その苦しさで涙と鼻水を滝のように流しているが、腕を縛られ何も抵抗出来ない青姫は、そのまま喉奥を犯され続けていた。

ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ

タダユキの青姫の頭を押さえる両手に力が入り、さらに激しく腰が振られる。

「うっ　」

タダユキは青姫の喉奥に射精していた。そして、自分の陰茎を青姫の口から抜く。

「おげえぇぇぇーーっ！」

やっと呼吸が出来た青姫が、口から精液を吐き出し、激しく噎せていた。玉藻の前は、そんな青姫を笑いながら眺め、タダユキに次の命令を出した。

「さあ、すっきりしたところで、そうですね、被っている下着を自分の口の中に全部入れなさい　その娘の糞尿の味を存分に味わうのです　良いですか、その娘の見ている前で味わうのですよ　」

さすがにタダユキは、しばらく躊躇っていたが覚悟を決めたように被っている青姫の下着を取ると、それを青姫の見ている前で口の

中に入れた。タダユキの口中に味わった事のない味が広がる。青姫は、そのタダユキの姿を見て、もう死んでしまいたかった。玉藻の前は、タダユキに青姫の汚れた下着の味を充分味わわせた後、再び命令する。

「それをそのまま飲み込みなさい　飲み込んだら、この娘の汚れた性器と肛門を舐めてきれいにするのです　」

タダユキは、ごくりと青姫の下着を飲み込むと、青姫の性器に口をつける。そして、舌を使い性器を舐め始めた。

「おっ、おっ、おっ、おっ　」

しばらくすると青姫が声を上げ始め、クリトリスが勃起してきた。

「くくく、哀れですねぇ　こんな状態なのに感じて性器を濡らしているのですか　」

青姫のクリトリスは固く勃起し、膣からは分泌液が溢れだしていた。

「良いですか、ヒダの間もきれいにするのですよ　肛門のシワの間もね　もちろん、二つの穴にも舌を入れて味わいながら舐めるのですよ　」

タダユキは命令された通りに青姫の性器を隅々まで舐め尽くす。もちろん、膣にも舌を入れ青姫の膣内もきれいに舐め、粘液を啜っていた。そして、青姫の肛門についている大便もきれいに舐めていき、肛門にも舌を突き入れる。

「おうっ、おうっ、おうっ、おうっ　」

青姫は泣きながら声を上げている。タダユキは、青姫の性器を舐め、青姫の味を味わいながら青姫の喘ぎ声を聞き、また自分のモノが硬くなっているのを感じていた。

「おうっ、おうっ、おうっ、おうっ　」

青姫の声もどんどん大きくなってくる。そして……。

「おあぁぁぁーーーーっ　」

プシャァァーーーッ

青姫が絶叫し尿道から潮が吹き出した。タダユキは青姫の潮を顔面に浴びている。

「人間というのは節操がないですね　オスもメスも、この状態で欲情しているのですか　良いでしょう、最後に交尾させてあげましょう　」

玉藻の前は念を送るとタダユキは大の字になり動けなくなった。そして、青姫の股をこれ以上ないほど大きく開き、タダユキの硬く勃起しているものに狙いをつける。

「さあ、最後の快感を味わいなさい　」

玉藻の前は、青姫の体を念でそのまま移動させる。

ズボウゥゥッ

「あうぅぅぅーっ　」

青姫の膣にタダユキの陰茎が根本まで突き刺さっていた。玉藻の前はそのまま青姫の体を高速で動かす。人間の動きでは考えられない程の速度で、膣内をピストン運動され青姫は無様に声を上げていた。

「あうっ、あうっ、あうっ、あうぅぅぅっ　」

そして、その高速の動きでタダユキも射精寸前だった。

「さあ、フィニッシュしなさい　」

玉藻の前が青姫の体の動きをさらに加速させる。

「あうぅぅぅぅぅぅーーーーっ　」

「おおぉぉぉーーーーっ　」

二人が絶頂の声を上げ、青姫はまた潮を吹き、タダユキは射精していた。

「ふふふ、お楽しみはここまでです　それでは、この娘の性器処刑を開始しますか　」

玉藻の前は放心状態の青姫に残酷に言い放った。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　中編（後書き）

凌辱されイカされてしまった青姫。
潮を吹き快感の余韻が残るなか、次回、青姫は処刑されていく。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　後編１（前書き）

すいません。後編、書き切れると思ったのですが、書いてるうちに長くなりそうな予感がしてきたので分割する事にしました。
例によってスカ、グロ要素ありますので苦手な方は気を付けて下さい。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　後編１

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　後編１

玉藻の前は、潮を吹いた余韻で放心状態の青姫の小陰唇を摘まみ、びろーんと激しく引き伸ばす。

「おっ、おっ、おっ、おっ　」

青姫は両腕を縛られ大きく開脚されたまま逆さに固定され声を上げていた。

「なかなか伸びますね　これは切断しがいがあります　」

玉藻の前は嬉しそうに青姫にハサミを見せながら言う。そして、青姫の目の前でチャキチャキとハサミを閉じたり開いたりする。そのハサミの鋭く光る刃に青姫は、自分の切断される小陰唇を思い浮かべ涙を流していた。

「さて、それではいきますよ　ただ切除するだけでは面白くないので、まず縦に短冊切りにしていきますね　」

玉藻の前は、引き伸ばした小陰唇の中央を縦にハサミを入れる。

ジョキィッ

「ひぎいいいーーーっ　」

小陰唇を縦に切断され青姫が悲鳴を上げる。が、玉藻の前は構わずに小陰唇を１０ミリ幅の短冊切りにしていく。

ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ

「あ、い、いだあああぁぁぁーーーっ　」

青姫の小陰唇が無惨に短冊切りにされる。青姫は哀れに絶叫していた。

「はひゅっ、はひゅっ、はひゅっ、はひゅっ　」

青姫は、小陰唇を切断されていく恐怖と激痛で過呼吸になっていた。が、構わず玉藻の前は反対側の小陰唇もつまみ上げる。

「さあ、こちら側もいきますよ　」

ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ

「もお、ゆるじでえぇぇぇーーーっ　」

小陰唇をズタズタに切断され青姫は泣きわめくが、玉藻の前は短冊切りにした青姫の小陰唇を一つずつ摘まみ、今度は根本から切断していく。

ジャキッ、ジャキッ、ジャキッ、ジャキッ、ジャキッ、ジャキッ、ジャキッ、

ジャキッ、ジャキッ、ジャキッ

「ひぎぃぃぃぃーーーーーーっ　」

一刻の後、青姫の性器から小陰唇が全て切断されてしまった。

「性器を守る襞が失くなってしまいましたね　無様な姿ですねえ　」

玉藻の前は号泣する青姫の姿を見て楽しそうに笑っていた。

「さて、次はこの小さな突起です　あの男の見ている前であなたの女を徹底的に壊して殺してあげますね　」

嬉しそうに玉藻の前はハサミを握り、青姫のクリトリスを挟む。

「おやおや、こんな時でも勃起しているのですね　この突起ともうお別れですから、最後にもう一度イカせてあげましょうか　」

玉藻の前はなにやら怪しげな坪に指を入れ、べっとりとした軟膏のような物を青姫のクリトリスに大量に塗りつけた。

「あうっ、あうっ、あうっ、あうぅぅーーっ　」

すると青姫が声をあげ始め、なんとクリトリスが1．5倍程の大きさに膨れ上がり硬く勃起していた。

「これは異界の媚薬ですよ　おそらく人間界の媚薬の数千倍の効果があるでしょう　以前、これを使用した人間の女は5分で発狂しましたね　あなたはどうでしょうね、青姫　」

「あばばばばばばば、あばあぁぁぁーーーっ　」

「あはは、無様な姿ですねぇ、青姫　面白いから、もっと塗ってあげますね　」

玉藻の前は青姫の膣前庭にたっぷりと媚薬を塗り込み、尿道や膣にも押し込み、膣に指を入れ子宮頸部にも塗りつけていく。

「どうかしら、Gスポットとポルチオに媚薬が染み込んでいく感覚は……　ふふ、バルトリン腺から大量に粘液が分泌されていますねそうそう、あなたも見ているだけでは詰まらないでしょう　」

玉藻の前は、青姫の前で大の字に拘束しているタダユキに手のひらを向け何か唱えていた。すると、タダユキの股間に半透明なゼリー状のものが貼り付きぐねぐねと動き出す。

「それは淫魔の一種ですよ　快感を無限に与えてくれます　あなたは、この娘が性器を壊されていく様子を見ながら、快感で射精していくのです　どうです、嬉しいでしょう　」

玉藻の前が楽しそうにタダユキに告げているうちに、淫魔はタダユキの尿道や肛門から体内にも侵入してくる。

「あっ、あっ、あっ、あっ　」

タダユキの性器は、これ以上ない程硬く大きく勃起していた。淫魔のゼリー状の体は、そのタダユキの性器をギュッと締め付け、振動しながら高速でしごきだす。尿道と肛門から入った淫魔は両方から前立腺を刺激する。

「あわわわわっ　」

もうタダユキも頭の中は真っ白になり、体はビクンビクンと痙攣していた。

「ふふふ、いい様ですね　それでは、この娘の性器破壊を続けましょうか　」

玉藻の前が青姫に目を向けると、青姫は小陰唇を切除された性器をグショグショに濡らし悶え狂っていた。

「アハッ、アハッ　入れて下さい　私のマンコに早く入れて下さい　私のマンコの穴、無茶苦茶にして下さいっ　」

青姫は、もう半狂乱になっていた。小陰唇を切除された激痛も忘れ、逆さにされた体をくねくねと動かし荒い息で叫び続けていた。

「人間と云うのは面白いですね　それなら、もう少し媚薬を使ってあげましょうか　」

玉藻の前は、今度は塗布するのではなく直接青姫の体内に注入する為、注射器に高濃度の原液を入れていた。そして、青姫の勃起しているクリトリスの頂点に針先を当てると、そのままズブッと深く突き刺した。

「あびゃあぁぁぁーーーっ　」

青姫が悲鳴を上げるが玉藻の前は、ヂューッと媚薬を注入してしまう。そして、針を抜くと今度は尿道口と膣口の間にも注射器を突き刺し媚薬を注入する。それだけではなかった。会陰にも針を深く

突き刺して媚薬を注入する。

「あひゃひゃひゃひゃっ、あっひゃあぁぁーーーっ　」

青姫はもう発狂寸前だった。もし、このまま性器に刺激を与えられれば、おそらく発狂してしまうだろう。

「さて、どうなりますか　」

玉藻の前は再びクリトリスをハサミで挟む。

「さあ、いきますよ　」

ジョキーーンッ

「おっ、ばあぁぁぁぁーーーーっ　」

プシャーーーッ

青姫はクリトリスを切除された瞬間、潮を吹いてイッテしまった。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

青姫のクリトリスが切断された瞬間、タダユキも激しく射精し、精液を飛ばしていた。

「いやあ、面白いですね　クリトリスを切断されて潮を吹く娘と、それを見て射精する男とは、面白くて笑ってしまいますよ　」

青姫は、まだ狂ったように身悶えている。タダユキは淫魔によっ

て、また強制的に勃起させられていた。

「面白いので、もっと射ってあげますね　」

玉藻の前は、狂ったような青姫の性器にまた注射器で媚薬を注入する。クリトリスは切除してしまったので陰核包皮に針を突き刺す。そして、膣前庭、会陰はもちろん、今度は尿道や膣にも注射針を突き刺し媚薬を注入していた。もはや、死んでもおかしくない程の大量の媚薬を注入されてしまった青姫は、バルトリン腺やスキーン腺からも粘液を分泌し悶え狂っていた。

「うーん、いい様ですね　これが散々魍魎を倒してきた討伐者の姿ですか　笑ってしまいますね　」

玉藻の前は青姫の膣に男根を模した性具をずぼっと突き入れる。長さ４０センチ、最大直径１５センチの巨大な性具が、青姫の膣に吸い込まれるようにするりと入ってしまった。

「どうですか、望み通り膣に入れてあげましたよ　嬉しいでしょうそれでは、もっと気持ちが良くなる事をしてあげましょう　」

玉藻の前は、青姫の膣に挿入した性具のスイッチを入れる。ブーンという音と共に性具が振動し始めた。

「あばばばばばばばっっっ　」

青姫が悲鳴を上げるが玉藻の前は更に振動を強くする。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃっっっ　」

「どうです　ポルチオとGスポットの同時責めですよ　媚薬を注入されて、この刺激ですからね　人間に耐えられるわけがありません」

プッシャァァーーーッ

ぶりぶりぶりぃぃぃっ

青姫は尿道から潮を吹き出し、肛門からは大便を漏らしていた。しかし、それで終わりではない。青姫は連続でイカされ続けていた。そして、ついに限界を迎える。青姫の中で何かが千切れるような感覚があった。青姫は、ついに発狂した。

「あびゃびゃびゃびゃっ、あっびゃあぁぁぁーーーっ」

青姫の目は虚ろで焦点が合わなくなり、開いたままの口からはよだれがだらだらと垂れていた。体はビクンビクンと痙攣している。

「発狂しましたか　人間にしては頑張りましたね　それでは、最後の仕上げに入りましょうかね　おや、自分のパートナーの発狂する姿を見て興奮しましたか」

タダユキは、潮を吹き続け大便も漏らし発狂した青姫を見て射精してしまっていた。大量に精液を飛ばしたタダユキの性器が淫魔によってまたすぐに勃起させられる。タダユキは涙を流しながら、発狂した青姫の姿を見ていた。そこには、あの凛々しい青姫の姿は微塵もなかった。精神を破壊され潮を吹き続ける哀れな青姫の姿を見ながらタダユキは早く自分を殺してくれと願っていた。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　後編１（後書き）

哀れにも発狂させられてしまった青姫。
しかし、当然それだけでは終わらず青姫は破壊され惨殺されていきます。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　後編2（前書き）

凌辱され発狂してしまった青姫。
その青姫に更なる残酷な仕打ちが行われる。

最終話です。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　後編２

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　後編２

小陰唇とクリトリスを切断され、媚薬を注入され哀れに発狂してしまった青姫。しかし、それで終わりではなかった。

「まだ、膣も子宮も残っていますからね　そこを破壊していきますよ　もう、発狂しているあなたには何を言っても分からないでしょうがね　」

玉藻の前は手のひらに異界の炎を召還した。普通炎は青やオレンジ色であるが、この炎は白色だった。

「異界の炎は多種ありますが、この炎は狙った相手の部位を完全に焼き尽くす迄消えない炎です　この炎であなたの膣を焼いて差し上げましょう　」

玉藻の前は、青姫の膣をガバッと開くと、その中にポトッと炎を落とす。たちまち炎は青姫の膣を焼き始めた。

「あばばばばばばばばばっ　」

発狂しているとはいえ膣を焼かれる激痛に青姫は条件反射で意味不明の声を上げていた。辺りに青姫の膣が焼ける異臭が漂い、玉藻の前はその臭いの強烈さに顔をしかめる。

「あなたの汚い性器は臭いも酷いですね　早く焼いて消滅させた方が世のためですね　」

玉藻の前は焼かれている青姫の膣に、さらに炎を追加する。一気に火力が上がり、青姫の膣から白い炎が激しく噴き上がった。凄まじい光景だった。開脚され大きく開いている青姫の股間、膣から炎が燃え上がっている。発狂してしまった青姫だが、その膣を焼かれる激痛で無様にえびのように反り返っていた。

「あばばばばばばばばばっ、あばあぁぁっ　」

青姫の膣壁はもう焼け爛れ、炭になっていく。そして、一刻の後ようやく青姫の膣を焼いていた炎が消えた。それは、炎が青姫の膣を焼き尽くしたという証だった。玉藻の前は黒焦げになった青姫の膣を確認し満足気に頷いていた。

「大切な膣も失くなりましたね　次はその奥にある子宮を壊していきましょうか　」

玉藻の前は炭になった青姫の膣の奥に覗く赤黒い子宮頸部を見つめ残酷に笑みを浮かべた。

ドスゥッ！

「！！！！！！！！！！！！！　」

玉藻の前は自分の手の爪を長く鋭く伸ばし、その爪で青姫の子宮を串刺しにしていた。子宮を串刺しにされ青姫は体をビクンビクンと大きく痙攣させていた。

「まだまだ、いきますよ　」

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ

5本の指全ての爪で青姫の子宮を串刺しにした玉藻の前は、そのまま青姫の子宮を切り裂いていく。

「あびゃあぁぁぁーーーっ　」

青姫の黒焦げの膣から血が噴き出していた。青姫の子宮をズタズタに切り裂いた玉藻の前は、そのまま鋭い爪でさらに細かく切り刻んでいく。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃ……　」

体の中心を襲う凄まじい痛みに青姫は体をエビのように反らせたまま絶叫する。青姫の股間から多くの血が溢れ青姫の白い体を鮮やかに染めていく。青姫の子宮も膣も完全に破壊された。そして、タダユキの前に青姫の切り裂かれ血を流す性器を拡げて見せつけ辱める。だが玉藻の前の残虐な行為はそこで終わらず、今度は太く長い木の杭を手にすると大きく笑いながら言う。

「汚いモノを漏らす、この穴も塞いでおきましょう　それと発狂していては、どうも反応が詰まらないですね　やはり泣き叫んで派手に苦しんでくれた方がやる方も楽しいですね　」

玉藻の前は青姫の頭に両手をかざす。

「この娘が発狂する前に少し時間を戻します　これで、この娘はま

た存分に苦しむ事が出来ますよ　」

「あびゃあぁぁぁーーーっ　」

正気に戻った青姫が、自分の性器が破壊された激痛で絶叫する。

「ほら、見なさい　今度はこの杭をあなたの肛門に突き刺してあげますよ　」

その杭を見た青姫は発狂したように泣き叫ぶ。

「ゆるじでぐだぢゃい　そんなの入らないでずうぅぅーーっ　」

泣き叫ぶ青姫の肛門に杭の切っ先を当てた玉藻の前は、グリグリと青姫の肛門に木の杭を突き刺し無理矢理押し込んでいく。青姫の肛門は裂け血を流し始めた。青姫はうめき声を上げ号泣している。玉藻の前は構わず青姫の肛門から青姫の中へ３０センチ以上あった木の杭を全て押し込んでしまった。青姫の肛門と直腸は、これで完全に破壊されてしまった。

タダユキは、その青姫のあまりに惨(むご)い姿に青姫が受けている凄まじい苦痛を思うと震えが止まらなかった。

「いかがですか、この娘の無様な姿　興奮してきますね　」

玉藻の前は、そこでふと気付き今度は青姫のセーラー服を切り裂き剥ぎ取ると、その下の下着も剥ぎ取った。ついに青姫は太ももに食込むサイハイソックスだけの姿にされ裸体を晒し辱められるが、玉藻の前は青姫を辱めるのが目的ではない。

「まだ、ここが残っていましたね　」

玉藻の前は、青姫の形の良い胸の膨らみの先端にある桜色の乳首を摘み引き伸ばすと、あっさりとそれを切り落とした。乳首を切断された青姫の胸から血が流れ出し、哀れに号泣している青姫の反対側の乳首も切り落とした玉藻の前は、今度はその胸の膨らみに鋭い爪を突き刺し切り裂く。更に反対の膨らみも残酷に切り裂いた。

「どうですか、さらに素晴らしい姿になりましたね」

玉藻の前は、顔面、胸、性器を破壊され血を流す青姫の凄惨な姿を見せつける。そして、青姫のその姿を十分見せつけた後、玉藻の前は青姫の片足を持ったまま人形を振り回すように頭上でグルグルと回し、地面に思い切り叩きつけた。青姫の体全体が地面に叩きつけられビクンビクンと痙攣し、また尿が漏れていた。

「あぅぅぅ」

もう自分が何をされているのか理解出来ない青姫であるが、その苦痛にはうめき声を上げるしかなかった。くくくっと笑いながら玉藻の前は続けて青姫の体を叩き付ける。そして、何度も何度も地面に叩きつけられているうちに青姫の全身がボロボロになっていく。

「嫌だ、もう止めて下さい」

タダユキが、もうこれ以上青姫に対する残虐な行為を止めるよう玉藻の前に懇願するが、玉藻の前がそれを止める気配はまったく感じられなかった。そして、腕を縛られ全裸の青姫を再び思い切り地面に叩きつける。その残虐な行為を繰り返しながら玉藻の前は、涙を流し絶叫するタダユキの様子をじっと観察していた。

「これでもまだ憎しみが足りないようですね　」

そう言いながら玉藻の前は、腕を縛られ顔面も胸も性器も破壊された青姫の足首を掴んだまま大きく腕を広げる。

「あなたの見ている前で、この娘をこのまま真っ二つに引き裂いて、完全に殺して差し上げましょう　どうです？　あなたももうこの娘を苦しみから開放して殺してあげたいと思いませんか　胸も性器も顔も壊され、もう生きていても何も良い事などないでしょうからね　」

玉藻の前は笑いながら腕に力を入れ、剥き出しにされ切り裂かれ血塗れになっている青姫の股間をタダユキによく見えるようにゆっくりと青姫の足を大きく開いていく。

「この股の割れ目から裂きやすいように少し切れ目を入れますかね　」

玉藻の前は青姫の肛門に突き刺したままの杭をズボッと抜く。その途端青姫の肛門から血が噴き出した。しかし、そんな事にかまわずに玉藻の前は青姫の股間の割れ目に沿うようにノコギリの刃を当てた。そして、まるで木材でも切るように青姫の割れ目をノコギリで引き始める。

「うぼおぼぼぼぼぉーーーーーっ　」

絶叫する青姫の割れ目を玉藻の前はノコギリで引いていく。青姫の割れ目が本当の割れ目になっていった。

「うぎぃぃぃぃーーーーーっ　」

青姫は子供のように激しく号泣しながら、性器を切られていく。
もう、恥丘の半分まで切断されていた。

「もう少し切断すればいいですかね　」

「ゆるじでえぇぇぇっ　何でもじまずがらあぁぁ、もうゆるじでぐだぢゃいいいいっ　」

青姫は無様に命乞いする。玉藻の前はそんな青姫の姿に失笑しゅっくりと青姫の足を開いていく。玉藻の前程の力があれば一気に引き裂くことなど簡単だろうが、青姫に苦しみと辱めを与えタダユキを闇に堕とす為、じっくりと青姫の足を開いていった。

「だじげで、だじげで……　お願いじまぢゅ、誰かだじげでくだぢゃい……　」

泣きながら許しを乞う青姫に構わず、玉藻の前は青姫の足を左右にどんどん開いていく。

「はぶうぅぅーーっ　いだい、いだい、いだいいいいっ　」

限界以上に足を開かれ絶叫する青姫の足から股関節が軋む音とブチブチと何かが千切れるような嫌な音がし、切り裂かれた股間の中心からはぴゅっぴゅっと噴水のように血が噴き出していた。

「さあもうすぐ、血と内臓を噴き出して真っ二つに引き裂かれますよ　」

水平まで青姫の足を開き、引き伸ばした玉藻の前が高らかに笑っ

ていた。腕を縛られ裸体を晒され顔面や胸や性器をも破壊され号泣する青姫は、今まさに股間から真っ二つに引き裂かれようとしていた。

「いだいよぉぉぉーーっ　誰か、だじげでえぇぇぇーーっ　あびゃあぁぁぁーーーっ」

それが青姫が最後に言った言葉だった。青姫の切り裂かれた性器の裂け目が拡がり、どんどん大きくなっていく。青姫の体は性器から真っ二つに、バリバリと裂け始め血と内蔵がこぼれ落ちる。そのまま青姫は右と左に真っ二つに引き裂かれ、玉藻の前の手からぶら下がり、ぶらぶらと揺れていた。青姫はもう苦しむ事はなかった。ただの肉片になり、地面に投げ捨てられた。

そして、玉藻の前の笑い声が、異界の闇に響いていた。

【無惨】惨殺される神宮寺卯月　後編2（後書き）

徹底的に壊され惨殺された青姫。

本編では救助に駆けつけた仲間によって救い出されますが、こちらでは救いの手は現れませんでした。

「ヒロイン敗北」はこれで一旦完結としますが、何かリクエストありましたら感想で連絡貰えると嬉しいです。

ありがとうございました。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n1630iw/

【処刑執行】ヒロイン敗北

2025年3月6日06時46分発行